

大阪女子大学附属図書館所蔵『不如学斎叢書』細目 一覧

著者	山中 浩之
引用	国際文化. 2005, 6, p.A1-A18
URL	http://doi.org/10.24729/00011225

『不如学斎叢書』細目一覽

山中浩之

大阪女子大学附属図書館貴重書庫には日本文学・芸能関係の写本・刊本類及び日本蘭学英学史関係資料が豊富に収蔵されていることは比較的によく知られている。しかし収蔵されているのはそれらだけではない。昨秋、本学創立八〇周年記念行事が行われた際、善本八〇点の展示を行ったが（大阪女子大学創立八十周年記念展覧目録 善本八十選）、できるだけ特定の分野のみに偏らないよう広く選択する方針が取られた。そのひとつに今回紹介しようとする『不如学斎叢書』があった。実のところそのときまで私自身も本叢書を手にとって見たことがなかった。この硬い叢書名からは内容の見当がつきにくく、また後述するように非常に大部なものなので、一見しただけでは全容を把握することができない。そのためほとんど知られないまま、これを利用した研究も寡聞にして聞かない。しかし、その第一冊目だけの展示であったが、その冒頭がケンペル著『日本誌』を志筑忠雄が翻訳した「鎖国論」で始まっていることは大いに関心をかきたてられた。

その後、実見したところ、本叢書は江戸期とくに十九世紀前半からペリー来航までの幕府の外交問題・海防問題についての一大叢書であることが明らかである。ただし全一六七冊、各冊、数十丁に及んでいるので詳細な内容把握は容易でない。しかし幸いなことに後述する編者によって一応の内容細目が作成されており、今回はそれを紹介して大方の利用の便に供したい。

(1) 紹介する前に、この叢書の作成者と整理に当たった関係者について一言しておきたい。本叢書の作成者は岡

田景徽という幕臣である。この人のことについては未調査であるが、整理に当たった瀧村鶴雄の序文(後掲)によれば、岡田氏は通称新五太郎、三餘堂と号した人で、安政二年(一八五五)「御勘定出役」となり、ついで「海防事務ノ局」に入り、さらに「銃砲製造・外国交際等ノ事」を担当して、文久三年(一八六三)五十七歳で没したという。文化四年(一八〇七)の生まれであったことになる。

残される「岡田家系譜」(附属図書館蔵)は景徽によって編まれたもので、景徽自身のことには最後に名前が記されるのみであるが、岡田家は代々幕府御家人で父は岡田正賢(通称新五左衛門)といい、小十人組に属し百五十俵取というかなり低い地位にあつた。景徽はその次男であり、小普請組奥田氏支配下で、安政末く慶応二年の武鑑には勘定奉行に属していた。(『寛政期以降旗本家百科事典』第一巻)。

ところで、本叢書の巻頭に勝海舟自筆の序が置かれており、海舟はその中で景徽とは青春時代の友であつたといつてゐる。二人がどのような関係にあつたかは、今具体的には知ることができないが、勝海舟の書簡集のなかに、岡田景徽あて書簡が十六通収められている(『勝海舟全集』第二巻所収、講談社、一九八二)。この書簡集はその内容から海舟の長崎海軍伝習所時代のものであることがわかる。海舟は安政二年(一八五五)正月、「蘭書翻訳御用」を命じられた後、同年九月、長崎に設けられた海軍伝習所の実質的責任者として赴任し、安政六年(一八五九)まで滞在した。その間、江戸の海舟宅について世話を頼まれたのが岡田景徽であつた。書簡の中で「留守宅、定めし万事御手数相願候事と、恐縮仕候。何分御指揮、偏に奉希候。」(安政二年十月書簡)とのべてゐる。事実、扶持米受け取り方とそれを長崎へ廻してくれるよう細かく依頼した書簡もみえる。そのなかに「已前は百五十俵四ツ物成」とあるように海舟の家も小普請組に属す下級幕臣の家であつた。海舟の父勝小吉がその小普請組から這い上がれず、無頼の生活を送つたことは自伝『夢酔独言』(東洋文庫)によく語られてゐる。おそらく岡田家と勝家は下級幕臣として同輩同士で、同じ住居地にあり、留守宅の世話も依頼しえ

たのであろう。

しかし海舟の書簡は江戸や留守宅のことにはほとんど触れない。もつぱら語られているのは長崎での伝習の内容であり、船の操縦技術、船の機関、そしてオランダ人教師を通して知られる外国事情などである。安政二年十一月の書簡には次のような一節が見える。「此程御勘定所江御出役被蒙仰候由、重々之御義、芽出度奉存候。殊に海防之御掛に御座候由、御繁務之御事と奉推察候」と、岡田景徽が勘定所出役となり、海防掛になったことが記されている。書簡は続けて「多年御研究之御學術にて天下に大裨益を御興行被成候御事も御手裏に御座候事と奉存候」といつている。景徽が多年、學術研究を積んできたことを海舟はよく知っており、海防掛になったことはそれを活かす上で、絶好の機会と感じていたようである。つまり、海舟と景徽は単に同輩の家というだけではなく、海防・外国問題について共通の関心をいだく関係にあったのである。海舟は書簡の中でしばしばオランダ語を日本語訳なしに使っている。「フルローレン」、「ガラーヘンハーフ」、「タクチーキ」、「ストラタヂー」等々。それで通じたとすれば岡田景徽もある程度オランダ語に通じていたということになる。このように岡田景徽と勝海舟は非常に親しい関係にあった。景徽は海舟より十六歳年長であったが、その外国と海防についての蓄積は海舟にも一定の影響を与えたのではないかと思われる。

景徽がこのように、海舟と関係をもちながら、開国と攘夷の対立もつとも激しい時期に外交や海防関係の職務に携わったことは本叢書の成り立ちと最も関係しているよう。叢書の内容はまさにそれと対応しているといつてよい。職務に応じ、関心に応じ「巨トナク細トナク」「雅トナク俗トナク」披見した書物・記録類を筆写していったのである。それが自然と蓄積されて一定の形を成したものがこの不如学齋叢書なのである。海舟がいう「多年御研究之御學術」とはこの叢書を指しているよう。その筆写ぶりからは景徽という人は非常に精力的であるととも篤実几帳面な人であったように思われる。

ところが、安政六年（一八五九）十月二十七日、吉田松陰が死罪の命をうけたのと同じ日、岡田景徽も「如何之趣、相聞候二付、差控」という処分をうけている（『藤岡屋日記』第九巻）。これはいわゆる安政の大獄による一連の処分の中の一つであった。景徽がなぜ処分をうけたのか、「如何之趣」というのが具体的には知られないが、景徽は西洋砲術家高島秋帆の自筆書簡にもみられるように（正集巻九所収）、その外国交易の建白書にも関係しており、幕府内の開明派に属したらしく、佐久間象山や吉田松陰の言動にも関心深かったことが本叢書からもうかがわれ、当時の幕府に一定の批判的立場をとっていたのではないだろうか。

ともあれ本叢書は当時幕府内において外交・海防関係の仕事の現場にいた人によってなつたものであり、そこには一般に容易に見る事のできない書物や記録が置かれていたことを思えば、本叢書は未知のものを含んでいる可能性がある。もちろん既知のものも多く含むが、これだけ大部な外交・海防関係の言説・記録を集成したものは他にそう多くはない。

ところで、本叢書が岡田景徽自身によつて一定の整理がなされていたのは第十三冊までであった。その没後にはおびただしい写本群が残されていた。その整理に当たつたのが瀧村鶴雄（小太郎）という人である。景徽には子がなかつたので瀧村鶴雄の弟良雄という人が岡田家に入り跡を継いでいたのである。鶴雄は「君ノ吏タルヤ余ト時ヲ同クシ」「余、君ノ人ト為リヲ熟知ス」といっており、瀧村鶴雄も小普請小笠原氏支配で、安政末（慶応二年）の武鑑には勘定奉行に属していることからすると景徽と鶴雄は幕臣として共通の職務についていたことがあつたのである。ところが後を継いだ良雄が「北地ニ戦死」したという。おそらく明治元年の東北あるいは函館での戦いを指しているよう。そのため新たに岡田家を継いだのが勝海舟の三男義徴であった。ただし養嗣義徴はまだ幼く、残された叢書の整理は無理であつたので、結局、瀧村鶴雄が当たることになつたのである。そしてこれは「余ヲシテ君ノ遺書ヲ点検綴緝セシムルニ至ル」といっていることからすると海舟の指示であつ

たように思われる。

そうして鶴雄は明治九年（一八七六）九月にいたり、まず外交・海防関係の写本一三〇冊を前集・後集と分けて整理した。その後明治十五年九月、さらに残された分を外集・余録として整理を加えた。外集は主として新たな産物の生産に関する技術書が多い。そして余録一四冊も外交・海防関係ではなく勘定奉行関係の記録であり、これも景微の職歴の一つで、勘定奉行における職務内容や取捌き方等について興味深い内容がうかがわれる。本叢書は以上であるが、そのほかに景微が書き残したものに「不如学齋日抄」（二十一冊）と鶴雄によって名づけられたものがある。これは日記ではなく、備忘録ないし読書ノートのようなもので、歴史・文学・芸能またオランダ語学習などにわたっており、仔細に見ていけば興味深い記事を見出すことができるかもしれないが、叢書と性格が異なっていること、また内容細目を示すことが困難でもあるため、ここにはその存在を記しておくに留める。

なお本叢書等は「瀧村記念文庫」の蔵書票が見返しに貼られており、瀧村家から大正十四年（一九二五）に本学図書館へ寄贈されたものである。それは登録番号によると本学図書館の最初の蔵書であった。瀧村文庫は受入原簿によると全五八四冊であり、その大半は儒学経典及びその注釈書で占められているが、その中でひときわ質量において他を圧しているのがこの不如学齋叢書一六七冊である。そしてもうひとつ注目さるべきものとして、この叢書にも関わる大部な稿本が含まれる。それは瀧村鶴雄によって著わされた『海舟傳稿』全二六冊である。これは年譜の形をとっているが、非常に詳密精確な海舟伝である。まず基本史料として海舟の自筆日記を掲げ、つぎに「参考」として関連する内容を海舟の他の著述等から出典を明記して引用し、さらに鶴雄自身が海舟から直接聞いた話を記している。ただし、伝は日記の残される明治三年十一月五日までであり（第二四冊）、あとの二冊は付録として海舟の遺文が集められている。実は先にふれた海舟の景微宛書簡もこの『海

舟傳稿』第二五冊付録甲篇に収録されている。この『海舟傳稿』の成立は序によれば明治三十一年（一八九八）十一月で、海舟の亡くなる前年であった。鶴雄は、海舟から自筆日記を用いて伝を作成することを許されるほど親近な立場にいた人である。「戊辰以来會計記」と題される勝海舟の支出入を記した記録の中に鶴雄は滝村小太郎の名で頻出する。『勝海舟全集』が刊行され、本書の使命は終わったようにもみえるが、全集編者もすれば本書を参照しているように、海舟のそばにいて自筆日記を全てみた人による伝としてその価値はまだ失われていない。瀧村鶴雄についても今後の調査が必要であるが、景微の後輩で、その後海舟に親しく師事した人であることは明らかである。なお付言すれば本学の前身大阪府女子専門学校の初代校長瀧村斐男はこの鶴雄の子であった。

不如学齋叢書の全体構成は正集（三二冊）後集（九八冊）外集（二三冊）余録（一四冊）の四部構成。余録のみ中本横綴じで、他は半紙本である。各巻一冊で全一六七冊。筆写資料は二四九種類にのぼる。丁数は万を越えるであろう。以下、内容細目の紹介に入るが、その前に勝海舟と瀧村鶴雄の序を原文のまま載せておく。

不如学齋叢書序

故岡田景微君、余青年友也。為人温雅沈闊而博聞強記、数見有益於凶書之事手自筆之積為数十卷、記曰不如学齋叢書哀集未全而逝焉、瀧村良雄為嗣、無幾戰没於北地、後以余三子義微為繼嗣、少而無檢収其遺書之備、良雄之舎兄瀧村鶴雄憂故人之手沢属散逸、順次校合前集幾許卷後集并外集幾許卷、據瀧邨氏数日之劳力整集完備矣、宜為後昆傳家之秘冊、嗚呼、君之遊魂知斯举、蓋有含笑於墟埃之表者哉

明治壬午仲秋

海舟勝安芳記

不如学齋叢書序

亡友岡田君諱八景徽、幼字八留橘、三餘堂ト号シ、俗ニ新五太郎ト称ス、幕府ノ士タリ、安政二年丁卯選マレテ御勘定出役ト為リ、尋テ御勘定ニ遷リ海防事務ノ局ニ入り更ニ銃砲製造外国交際等ノ事ヲ担任シ、職ニ在ル数年拮据黽勉裨補スル所多シト云フ、文久三年癸亥病ヲ以テ没ス、享年五十有七、嗚呼、余君ノ人ト為リヲ熟知ス、其人ト為リヤ沈重ニシテ多能、聞見博クシテ傍ラ数理ニ長セリ、其自ラ奉ズル、謙約節儉ニシテ談謔遊戯ヲ好マス、寮友皆以テ奇人ト為ス、外交ノ端既ニ開ケ、攘夷ノ論方ニ盛ナルニ当リテ、常ニ意ヲ内外ノ事情ニ注キ、凡ソ巨トナク細トナク、雅トナク俗ト無ク、其覽閱スル所ニ從ヒテ之ヲ謄写シ積ミテ冊ヲ成ス、名ケテ不如学齋叢書ト曰フ、此書第一冊ヨリ第十三冊ニ至ル、而シテ第三四冊及ビ第八九冊ヲ逸ス、別ニ殘冊若干アリ、或ハ叢書ノ第十四冊以下ニ擬スル者力、或ハ別緒ノ蒐集ニ属スル者力、之ヲ知ルニ由シ未キナリ、然ルト雖モ固ヨリ是レ叢書ニシテ敢テ秩序順序ヲ定ムル者ニアラザレバ、今此殘冊ヲ以テ闕ヲ補ヒ、又其余ヲ添加シテ三十二冊ト為シ、其他書目既定ノ者ヲ以テ後集ト為シ、目錄ヲ付シ檢閲ニ便ニス、抑モ前人ノ意後人知ラズ、君ノ靈魂必ラズ隔靴搔痒ノ嘆アラシ、嗚呼、君ノ吏タルヤ余ト時ヲ同クシ、其没スルヤ、君ノ子無キヲ以テ余ガ舍弟良雄実ニ之ガ嗣ト為リ、良雄ノ北地ニ戰死スルヤ、海舟勝君ノ三子義徵入りテ嗣グ、而シテ其尚ホ幼ナルヲ以テ、遂ニ余ヲシテ君ノ遺書ヲ點檢綴緝セシムルニ至ル、亦何ゾ因縁ノ深キヤ、爾來多忙既ニ數年ヲ曠クス、今秋小閑アリ、余ノ情事始メテ申ブ、因テ其概略ヲ記ス

明治九年九月

瀧村鶴雄印

再ビ殘冊ヲ拾ヒテ外集ト為シ、日抄其他、叢書ニ入ルベカラザル者ヲ号外ニ掲グ

明治十五年九月

鶴雄又識

内容細目

不如学齋叢書・正集

- 卷之一 一鎖国論 ケンブル氏ノ日本志ヨリ志筑忠雄訳
- 卷之二 一日本紀事抄ケンブル氏原著高橋景保譯 一丙戌異聞并附録
一別埒阿利安設戰記紀元一千八百十四年二起ル 一諳厄利亞人性情誌
- 卷之三 一大西小学 一破提字子 一伴天連ノ話
- 卷之四 一伴天連岡本三右衛門一件附切支丹ノ議ニ付キ種々ノ書物
- 卷之五 一邊警紀聞
- 卷之六 一龍ノ宮夢物語水戸家ノ事ヲ記ス入江豊水 一告志篇 水戸斉昭卿 一斉昭卿書簡
- 卷之七 一海国兵談略抄 附林子平肖像同人籠居中和歌同人蟄居申渡同人赦免申渡同人墓碑同人書牘同人傳
- 卷之八 一海冠竊策 一問答十策 一豈好辨 一防海策
- 卷之九 一長崎町年寄高嶋四郎太夫(秋帆)砲術之儀ニ付差出候書面
一長崎奉行田口加賀守右書面進達ニ及ビ目付へ下ゲラレ鳥井耀藏存寄書付駁議
一徳丸之原於テ高嶋四郎太夫火業井上左太夫身分之上差出候書面并左太夫建白
一砲術新旧得失問答
一高嶋四郎太夫徳丸之原ニ於テ火業之書留

一 高嶋四郎太夫追放并伊澤美作守其外之輩咎一件

一 高嶋喜平(四郎太夫免罪後改名)存意建白

一 同人ヨリ岡田景徽へ書簡

一 同人交易仕方之大略取調書

卷之十

一 山田仁左衛門長政紀事

一 對馬国以酌庵へ五山ノ長老ヲ差遣ハサレ并客使ノ館伴タル事

一 和蘭甲比丹對話筆記

卷之十一

一 善助漂流記

一 尊号廷議寛政四年閑院一品宮尊号ノ議ニ付廷議其外書類中山前大納言閑門之始末也

一 一望遠鏡觀諸曜記

一 大坂今橋九兵衛船沖船頭和助以下於豆州下田荷役濱改帳文化二丑年

卷之十二

卷之十三

一 長崎諸役人并寺社山伏分限帳 一 一年限之信牌写

一 未ノ阿蘭陀船壳荷物直組帳 一 鯨捕之事鯨二六種アリテ捕様違フ事大地角右衛門答

卷之十四

一 別当左衛門覚書一名島原一揆之次第

一 朝鮮南大門合戦之記 一 澤村才八覚書細川三歳軍功 一 佐田文書 一 瀬尾文書

一 関が原之一卷 一 岡田竹右衛門覚書 一 天馬異聞 寛永十四年天草有馬切支丹一揆之時ノ甲比丹

ノ日記ヲ譯シタルモノナリ

一 カラフト・エトロフ場所番人共相尋候趣申上文化四卯年

一 蝦夷地番人共へ御書取之趣ヲ以相糺候申上同年

卷之十五

- 一 大村次五平申立候魯西亜船鉄砲之図并仕掛訳書
- 一 来年魯西亜船来候節取扱方大意書取文化四卯年 一右二付存寄申上
- 一 蝦夷地取計方之儀二付申上并別紙文化五辰年
- 一 蝦夷地御固人数之儀二付申上
- 一 来巳年蝦夷地御備向之儀申上文化五辰年
- 一 蝦夷地御固人数之儀二付申上同年
- 一 蝦夷地御備向之儀二付猶又申上同年 一同再三申上同年
- 一 当年魯西亜人渡来仕候節打払之儀伺文化六巳年
- 一 魯西亜人渡来仕候節其外取計方之儀伺同年

卷之十六

- 一 東西蝦夷地運上金覚 一同地家数人別調書 一同地産物調書
- 一 松前三場所并東西蝦夷地之事実内密風聞糺方仕候儀申上候書付
- 一 改革之節被申渡候沖之口役所規定書
- 一 箱館町出火焼失之事実内密糺方仕候儀申上候書付
- 一 天保祖金録 一 蝦夷地産物
- 一 佐久間修理上書 一 礮掛同人著 一 詩同人 一 増訂荷蘭語彙叙同人 一 をしへくさ女
- 一 かゝみ同人 一 急務策一則吉田寅次郎 一下田港大略記嘉永七年ペルリ渡来之節
- 一 長州藩吉田寅次郎異船へ乗入候一件
- 一 瓜中万二市木公太ノ名(寅次郎重之助偽名)ヲ以テ亜米理加船將へ贈リタル書翰
- 一 感情歌百首佐久間修理

卷之十七
 一吉田寅次郎蟄居申渡書 附佐久間修理其外關係之輩蟄居押込手鎖等之申渡書
 一松本斗機藏上書 一読海防諸策山本錫夫 一宋真宗論奥野純 一攘夷論池内大学

卷之十八
 一兵勢臆談 一擬對論 一海備鄒言
 一洋製測時器記 一地勢提要高橋景保 一竹嶋図説

卷之十九
 一荷蘭密告天保十四年 一荷蘭密告統嘉永五年 一魯西亞国王書翰其外文化元年・同巳年

一諳厄利亞人ヨリ差出候横文和解天保二年

一文化八年クナシリ島ニテ召捕候魯西亞人於箱館吟味書

卷之二十
 一阿蘭陀方商売荷物元払等大意識書

卷之二十一
 一レイハンヤツパン拔萃外国人日本通商之企亜米利加人当今日本志望之載タル公顯ノ告牒記録

一體性論付記西国詩人語録一則 喩言一則 近日雜報 一統日本日記

一蝦夷地開拓之儀ニ付老中阿部伊勢守ヨリ箱館奉行并箱館掛り勘定奉行へ尋之書取附右奉行連名之

評議上申 安政元年 一蝦夷大概図

卷之二十二
 一無造作日記抄享保元年蝦夷地戰中独吟 一髯塚の銘文化四年 エトロフ 一長崎ヨリ廣南へ参り候

海上免状 一箱館沖にて夥しく網にかゝりたる魚の図

一とゞの皮にて縫合せたる舟の図 一若年寄堀田摂津守正敦蝦夷地巡撫之節之詩文等文化四年

一蝦夷地在住之者切米扶持方渡方元濟文化五年 一荒熊打留 一幸太夫へ尋候趣

一異国船渡来之節無二念打払可申旨ふれ文政八年

一伝吉左兵衛忠次郎長三郎漂流し魯西亞より護送の事天保七年

一異国船渡来之節打払不申食物薪木を与へて帰帆為致候様触天保十三年

- 一 下総銚子へ漂着之唐船ニ被助候遠州川崎港和吉船沖船頭文助其外乗組之者共吟味一件文化四年
- 一 久春古丹弁天鳥井ニ打置候銅板之写 一魯人ホーシトフ書面
- 一 和蘭甲比丹へんでれきどうふ倅文吉を通詞ニ御抱入願
- 一 近藤重蔵(守重)書状 一松前志摩守届
- 一 蝦夷人共へ教育通辯書寛政十一年 一青柳貞一書上寛政十一年
- 一 山田鯉兵衛ゑとろふ島御処置居合候趣申上候書付
- 一 近藤重蔵総蝦夷地御要害之儀ニ付心得候趣申上候書付
- 一 中村小十郎高橋次太夫唐太島見分仕候趣申上候書付
- 一 河尻肥後守荒尾但馬守蝦夷地取計方之儀ニ付申上書付
- 卷之二十三 一魯西亜船蝦夷地センヘコタンに渡来水手与茂吉上陸等之一件文化九年
- 卷之二十四 一魯西亜人莫宇留獄中上書文化九年 一魯西亜船之節取計手續文化九年
- 卷之二十五 一三国通覽補遺魯西亜略説附蝦夷風土記案スルニ三国通覽ハ林子平ノ著述ナリ
- 一 太平策
- 卷之二十六 一護国後論
- 卷之二十七 一此度乗渡候新甲比丹ヨリ唐国之地マカヲト申所ニ罷在候漂流日本人ヨリ之書状ニ封差上取計方
 一奉伺候書付天保十三年長崎奉行柳生伊勢守
- 一 フランス国之船渡来致し候ニ付相尋候趣其外之儀先申上置候書付弘化三年長崎奉行井戸对馬守
- 一 宗对馬守家来ヨリ之願書弘化三年
- 一 宗对馬守へ金壹万兩拝借之申渡嘉永元年

- 一 朝鮮へ異様之船来舶一件弘化四年
- 一 和蘭甲比丹ヨリ差出候風説書弘化四年 附咬留吧頭役ヨリ御聞二達候様申越候儀申上其外書類
- 一 領分之儀松前宗津輕南部等ヨリ之届 嘉永元年
- 一 南方海島志 八丈島 青島 小島 小笠原島 波津島 御子本鐘礁
- 一 御府内四里四方町数家数人口 一 御蔵米高下直段付 一 日本國中諸宗寺数
- 卷之二十八 一 魯西亜一件文化五辰年ヨリ同十四年マデ
- 卷之二十九 一 松平越中守定信豆相房総海防巡見之次第并意見書取等寛政三年亥年ヨリ同九丁巳年マデ 附文政六年未十二月森覚蔵へ申達書
- 一 同人異国船之事海防之事等を子孫に教誡する書
- 一 同人鸚鵡言
- 卷之三十 一 海防臆測天保九年古賀侗庵
- 卷之三十一 一 高橋三平愚意申上候書付文化六巳年蝦夷地ノ儀
- 一 蝦夷地御用金訳書寛政六年ヨリ文化六年マデ
- 一 松前蝦夷地産物明細記
- 一 松前家秘説
- 卷之三十二 一 洋外紀畧安積良斎
- 不如学齋叢書・後集
- 卷之一―三 一 異国日記摘要

- 卷之四
 - 一五月雨抄
- 卷之五—六
 - 一東西護送旧聞
- 卷之七
 - 一東西護送旧聞補遺
- 卷之八
 - 一船長日記
- 卷之九
 - 一幸太夫談話
- 卷之十
 - 一北槎異聞
- 卷之十一
 - 一北槎紀聞
- 卷之十二
 - 一北覽抄
- 卷之十三—十四
 - 一二叟談奇
- 卷之十五
 - 一北地危言
- 卷之十六—十八
 - 一地北寓談
- 卷之十九
 - 一地北寓談備考
- 卷之二十
 - 一休明光記文化度蝦夷地事務ノ記ナリ
- 卷之二十一
 - 一休明光記拾遺
- 卷之二十二—二十四
 - 一休明光記附錄別卷
- 卷之二十五—二十七
 - 一文化度魯西亜一件御用留
- 卷之二十八—三十四
 - 一蝦夷雜錄
- 卷之三十五—四十
 - 一火攻精選
- 卷之四十一—四十五
 - 一礮家必読

- 卷之四十六 一用礮軌範
- 卷之四十七 一煩礮用法
- 卷之四十八 一煩手学校正読
- 卷之四十九—五十 一鍊卒訓語
- 卷之五十一—六十三 一答古知機
- 卷之六十四—六十八 一經濟録
- 卷之六十九 一大学或問
- 卷之七十 一柴野栗山朝川善庵建議
- 卷之七十一 一中井竹山茅議
- 卷七十二 一經世秘策
- 卷之七十三 一救荒便覽前集
- 卷之七十四 一救荒便覽後集
- 卷之七十五—八十三 一遊歷雜記 一積敬順
- 卷之八十四 一備忽忘抄 一積敬順
- 卷之八十五—八十六 一統備忽亡抄 一積敬順
- 卷之八十七—八十八 一置土産抄 一積敬順
- 卷之八十九 一柳川侯隨筆抄
- 卷之九十 一日本国郡沿革考 一荒井顯道
- 卷之九十一 一貨幣通考

卷之九十二—九十八 一地方落穂集

不如学齋叢書・外集

卷之一—三 一遠西医法名物考抄

卷之四—七 一開物総論抄

卷之八 一農業自得

卷之九 一種樹園法

卷之十 一養蚕須知

卷之十一 一人参耕作記 一物類品騭卷六付録人参培養・甘蔗培養 一砂糖製作記 一砂糖製法雜記

卷之十二 一漆髹秘録 一銃砲鑄造要鑑 一和蘭焼付法

卷之十三 一椎茸製作法 一大黄製造法聞書 一石版畫法 一瀝青製法 一蚕養育手鑑 一養蚕録

一動植桑養蚕書 一竹実記

卷之十四 一盆魚伝

卷之十五 一かまどのにぎはひ

卷之十六 一中饋餘録

卷之十七 一漬物伝授

卷之十八 一ちゑふくろ

卷之十九 一古今秘苑抄録

卷之二十一—二十二 一新選三体詩

卷之二十二 一統三体詩選

卷之二十三 一韜鈴風雅

不如学齋叢書・余録

卷之一 一御勘定書定書 一御勘定所勤方等之部 一御代官諸入用拝借等之部

一御城米破船之節吟味之部 一諸役所定書并御切米扶持方渡方等之部

一諸国御困米之部 一御鷹場之部 一寺社修復金之部 一雜之部

卷之二 一奉行所懸り場之部

卷之三 一御勘定所掟并御料取諸事取計之部 一御取置一件并夫食貸等之部

一檢地条目并知行割新田一件之部 一諸国堤川除御普請并潰地代地等之部

卷之四 一石盛并村高庄米等之部

卷之五 一御勘定所勤方大概

卷之六 一御勘定所御取箇方書留 一断訟類篇 同付録

卷之七 一御仕置大意 同付録

卷之八 一上方紀州關東三流普請仕法

卷之九 一金位并金吹方手續書 一銀位并銀吹方手續書

卷之十 一驛肝録

卷之十一 一旅中取扱方大意 一大坂兵庫箱館産物会取立会 一遠国御用諸書留并諸道具覚

卷之十二 一御手当其外書拔

卷之十三 一殿居囊

卷之十

一 撰陽秘録